

スウェーデンで 見たもの:在外 勤務から



当別町の姉妹都市レクサンドの夏至祭イベントにて

坂田 誠一 (さかた せいいち)

前・在スウェーデン日本国大使館一等書記官
国土交通省北海道開発局開発監理部開発連携推進課
上席専門官

2004年北海道開発局入局。函館開発建設部、国土交通省北海道局、国土政策局、開発局本局等での勤務を経て、2021年3月から2024年3月まで在スウェーデン日本国大使館経済班で交通・電気通信インフラ、国際開発援助、日本産食品普及促進、姉妹都市交流等の業務を担当。2024年4月から現職。

はじめに：直行便就航

2025年1月31日、羽田空港とスウェーデンの首都ストックホルム・アーランダ空港を直接結ぶANAの航空便が就航し、スウェーデンは東京からは航空機の乗り継ぎなしで行ける、ぐっと近い国になりました。

ANAが直行便を就航させる方針を決定し、近く公表することを、私がANAの方から電話で聞いたのは、その約1年前、ストックホルムの在スウェーデン日本国大使館内でした。

現在はロシア領空を飛行しないため、10時間を切る最短ルートでの飛行ではないのですが、多くの日本の方にスウェーデンを訪れてみてほしいです。ベストシーズンは夏です。

コロナ禍での着任と大使館での勤務

私が家族とともにストックホルムに着いたのは2021年3月上旬、コロナ禍の真っ只中でした。スウェーデンは日本と同じくロックダウンをせず、当初、政府はソーシャル・ディスタンスを重視する一方でマスク着用を推奨していませんでした。着任前の1月に政府によって通勤時間帯の交通機関内のマスク着用が推奨されたことを知っていたのですが、着任後、出勤時のバス・地下鉄内でもマスクをしている人は全然いないことに驚きました。

着任当初、大使館の仕事は職員を2グループに分けた隔日出勤でした。オフィスは個室で、出勤日も同僚と近距離で同じ空間を長く共有することは多くなかったです。ただ、自室を出て共通スペースに行くときや同僚や上司への相談に行った際はお互いマスク着用という館内ルールはあり、それは1年ほど続いたと記憶しています。

スウェーデンの政府機関は、コロナ禍では職員に在宅勤務を推奨し、政府側の方としばらく直接会うことはできず、最初にスウェーデン政府の方とミーティン



ストックホルム市庁舎(左)付近。市庁舎の塔はジブリ映画「魔女の宅急便」の時計塔のモデル

グを行ったのはオンライン会議で、私は大使館から、先方2名はともに自宅からでした。

着任した年の8月頃に隔日出勤がなくなって通常どおりの出勤となり、2022年2月、オミクロン株の流行中に、政府によりイベントの人数制限等の規制緩和方針が発表されました。オミクロン株は感染力が強いものの、ワクチン接種も進んでおり重症化しにくいためでした。段階的規制解除を発表したものでしたが、流行の真っ只中で政府が規制緩和方針を発表することに対しては、周辺諸国でも概ね同じ頃になされたものの、日本との違いを感じました。

2年目の4月にはスウェーデン入国に関する規制も解除され、日本からの出張も少しずつ再開されました。その頃はまだ日本への帰国には出国前にPCR検査で陰性となっている必要があったため、出張者に現地で便宜を図る「便宜供与」という業務の中に「出張者の帰国前検査のためにストックホルム近郊のPCR検査機関を調べて検査を予約し、出張者に予約情報・検査機関の場所を教える。場合によっては同行する」というものが加わりました。日本側が検査を必要としている一方、諸外国の規制解除の流れでストックホルム近郊の検査機関がどんどん減っていったため、対応が発生した館員間で「あそこの検査クリニックはなくなった」「まだここのクリニックでは検査できるらしい」「まだ空港でも検査は受けられる」といった情報を交換しながら対応しました。今思えば2022年の夏から秋にかけてのみ発生した、そういう意味でも奇妙な仕事でした。



「距離をとってくれてありがとう」という表示（スーパーの床）

この頃以降、現地政府等の方と会って要請や意見交換を行うという、「大使館業務としては通常」のスタイルに戻っていったのですが、コロナ禍に初めて大使館員となった私は政府側担当者とは会って話をするという仕事に不慣れで、初めて一人で政府側に要請に行ったときは大変緊張し、何とか用務は果たしたものの、思い描いていたようには話せなかったことを覚えています。

美しい水の都・ストックホルム

誰が言ったか知りませんが、ストックホルムは「世界一美しい首都」「北欧のベニス」と言われているそうです。ストックホルムは「メーラレン湖」の湖畔、バルト海への出口付近に位置します。市域には湖と複数の島があり、島どうしは橋や地下鉄で繋がっている



尖塔のある教会

のですが、その水辺や対岸のたくさんの建物・屋根、ところどころ見える北欧に特徴的な教会の尖塔も見える景色は、非常に美しいです。

美しいのは水辺からの景色だけでなく、住宅街の街並みもとてもきれいです。日本と大きく異なるのはストックホルム市内の建物で、現代建築もありますが、多くは近代建築ということです。築100年ほどのアパートも珍しくないどころか、多くはそれくらいです。我が家が借りたアパートも、建物は築およそ100年でした。もちろん内装は100年前のままではなく、歴代のオーナーにより新しくされています。

市内の多くの建物は、基本的には5・6階プラス屋根裏階という造りで、建物の高さが大体揃っています。大抵2階以上は集合住宅で、1階もアパートであることもあれば、1階または半地下部分が店舗や事務所となっている場合もあります。建物の色や形は統一されてはいませんが、多くは茶系・黄土色・クリーム色・暖色系といった落ち着いた色合いで、窓の枠や格子は大抵白く塗られていて、同じ建物の窓は等間隔に並んでいます。そのような建物がストックホルム市内では沿道に隙間なく建っており、廃屋や空き地は皆無と言っていいほど無く、大きな看板も無く見通しが良いため、歩道を歩けば、調和の取れた街並みが遠くまで見渡せます。

電線はほぼ地中化されていて電柱はほとんど見あらず、街灯の支柱も最小限です。街灯は道路の両側の

建物の壁にボルト留めで道路上を渡されたワイヤーに吊られているのが標準です。道路の両サイドは駐車スペースになっているので歩道沿いに縦列駐車車が並んでいるのですが、見通しの邪魔になる背の高いものはほぼありません。



吊られている電灯はLED

歩道上はところどころ汚れや犬のフンなどがあり、日本ほどきれいではないですが、街並みの美しさには飽きることがなかったです。

スウェーデンの夏

スウェーデン訪問のベストシーズンは夏と言いましたが、もちろん観光の話です。

ストックホルムは北緯60度くらいで、札幌より約1,800kmも北に位置するのですが、緯度でイメージする程寒くなく、気温は札幌と概ね同じ、または少し低めというくらいです。緯度が高いので真夏も暑過ぎず、台風のような暴風雨も来ず、穏やかです。サマータイムもあって夜は11時頃まで明るいこともあり、とても快適に過ごせます。が、日本大使館のスタッフにとって悩ましい事情があります。

スウェーデンでは、暦上の夏至（例年6月21日頃）後の土曜が「夏至祭」という祝日です。その前日の金曜も事実上の休日で、前夜祭としてまちの広場で「メイ・ポール」を立て、輪になって踊り、夏が来たことを盛大にお祝います。なお、祝日である土曜日には特にイベントはありません。学校は6月20日頃には学年が終わって8月上旬までの夏休みに入ります。6月下旬から8月上旬が長いバケーション期間です。

スウェーデンの方は家族と過ごす時間を大事にし、法的にこの時期3週間以上連続した休暇を取る権利が保障されていることもあり、特に7月には3週間以上の長い休暇を取得する方が多いです。政府機関はカラにはなりませんが、出勤者は半数以下となり、この間のスウェーデンは「大使館が依頼したいことがなかなか進まない国」になってしまいます。

一方、日本で通常国会が終わり、政府の要人や国会議員の外国訪問が多くなるのが7月中旬からです。日本から国会議員や大臣等による7月のスウェーデン訪問という希望があっても、現地は事前に政務クラスも職員も調整して休暇を取得するので、不在というケースが多く、希望どおりのアポ取りが非常に難しくなります。私の在任中、1年目はコロナ禍だったため日本からの訪問希望はなかったのですが、2年目には国会議員、3年目は大臣の訪問希望がありました。面会相手候補・訪問先のリストを作り、現地スタッフに上から順番にアポ取りしてもらおうのですが、不在予定の方が多く、なかなか苦勞しました。それでもどうにか複数の訪問先・面会をセットし、どうしても時間が空く場合は視察先等をひねり出してスケジュールを埋め、行程を作ります。

ということで、スウェーデンの夏は要人が出張するにはベストシーズンではないのですが、両国それぞれの事情があるため、大使館員の夏の苦勞は今後も続くでしょう。

地域公共交通とキャッシュレス

スウェーデンでは、全国に21あるレーン（県）ごとに、県内の公共交通を運営する公営企業があります。ストックホルム県では、県内のバス、地下鉄、トラム、ストックホルムと近郊の町を結ぶ通勤電車、そしてストックホルム周辺の河や湖を行き来する通勤用フェリーを、S L (Stockholms Lokaltrafik) という公営企業が担っていますが、実際の運行はS Lが運営権の入札を経て外国企業も含めたバス運行会社、鉄道会社などに委託しています。例えば私の在任中、ストックホルム県の鉄道（地下鉄、通勤電車）を運行していたのは、香港の鉄道会社であるMTRでした。

乗り方で日本と大きく異なる点として、S Lでは、移動距離ではなく利用した時間に応じて運賃が徴収されます。このため乗物に乗ったときに改札・運賃徴収があり、降りるときには改札がありません。75分が1単位時間となっていて、ある日の最初の改札から75分経過後に別の乗物に乗り換えたら、自動で次の単位時間分の料金が徴収されます。経営主体が同一であるた

めか、例えばバスから地下鉄やフェリーに乗り換えても、その逆の場合も、単位時間内であれば、追加の料金は徴収されない仕組みです。

チケットは単位時間のチケットの外、1日・3日・7日間や1か月、3か月、6か月、1年の期間チケット、そしてお年寄り向けや、学生向けに期間や利用時間がやや限定されている割引チケットなどがあります。

私は通勤にバスや地下鉄を使い、子どもも通学に地下鉄を利用していました。妻も子どもの学校の迎えるため地下鉄を利用し、家族全員が期間チケットを持っていました。それなりの金額を事前に払うのですが、チケットの仕組み上、期間中はS Lの公共交通機関が乗り放題となります。通勤経路を行きと帰りで変える、週末に県内のやや離れた場所に出かけるのにも新たに交通費がかからず、自家用車を持たなかった我が家は翼を得たような気分で、特に週末は大いに活用しました。

そしてS Lでは、チケット購入に現金を使えません。着任した頃には地下鉄駅の改札機のそばに各種のチケットを専用のICカードに登録する方式の券売機があり、その券売機で印刷される単位時間の紙チケットもありましたが、支払いはデビットカードまたはクレジットカードのみでした。その後システムが更新され、スマホのアプリで単位時間のチケット・各種の期間チケットが買える他、チケットをQRコードで表示させてかざすことで、改札を通れます。またアプリやICカードを持っていなくても、タッチ式のデビットカード、クレジットカードを改札機にかざすことで、単位時間料金の支払いができるようになりました。バスもフェリーも同様です。現在、S Lの券売機はなく、アプリか専用のICカード、またはデビットカード・クレジットカードで利用します。

ストックホルム県以外のいくつかの県でも公共交通を利用しましたが、どの県もそれぞれ公共交通の専用



地下鉄ストックホルム中央駅のホーム階。壁・天井のペイントは観光名所のひとつ

アプリがあり、アプリで事前にチケットを購入でき、現金を使わないことは共通でした。アプリは私のスマホではスウェーデン語でなく英語表記で、外国人にも便利に作られていると思いました。

なお、スウェーデンの銀行キャッシュカードはデビットカード機能が付いていて、銀行口座を持っている人はカードでの支払いが可能です。カフェやレストランでは現金で支払いができない店も多く、大半の人はキャッシュレス生活を送っていると思われます。

キャッシュレス化は、企業側の人件費含むコスト削減に繋がるのが導入理由のひとつです。現地スタッフから聞いた話では、スウェーデンでは企業がコスト削減を理由に人員を減らすこと、それに伴って仕事を失う人が出ることも、時代の変化の中で起こる当然のことと考えられていて、仕事を失った人はリスキング等を経て別の仕事に就く機会も得られることもあり、「企業は従業員の雇用を守るべき」「解雇は悪いこと」という意識は一般的にあまりないそうです。

スウェーデンの方は英語が上手

スウェーデンの公用語はスウェーデン語ですが、多くの方が英語も流暢に話します。まちなかで英語が通じなかったのはたった一度、ケバブ屋さんで食べようと列に並び、注文しようとしたところメニューがスウェーデン語のみで写真がなく、店員さんがトルコの方で母国語とスウェーデン語しか話せなかったことがありました。ただ、そこはスウェーデン。店員さんがお願いすると、後ろに並んでいた方が英語で通訳してくれて、無事食べられました。

学校では、小学校1年生から簡単な英語の授業が始まり、中学で英語での議論、小論文を書いたり、しっかり取り組むのだそうです。高校生は英語でのコミュニケーションに不自由していない様子でしたし、子どもが入った地元のバスケットボールチームでは、小学6年生のチームメートはうちの上の子と英語でコミュニケーションをとって来ていました。一方で下の子のチームメートは英語を話さず、もっぱらスウェーデン語だったそうで、小学校3年生くらいだとまだそれほど英語を話さないようです。

英語ができる理由に関し、仕事で会ったスウェーデンの方々によく「スウェーデンは小国だから」と言っていました。たしかに、人口は約1千万人と日本の10分の1以下です。世界の中ではマイナーな母国語だけでなく英語を不自由なく使えるようにするという方針を国が持っていて、中学まで英語の授業時間数が多いようです。自国をそのように見て実践的な教育ができている点は、スウェーデンの強みと思いました。

もっとも、これもスタッフに聞いた話ですが、英語を学び始めたとき「簡単だ」と感じたそうです。「まず文字が同じだから」と。英語とスウェーデン語は源流が同じ、比較的近い言語なので、簡単と感じるのだと思います。そしておそらく、現在はもう大人がみんな英語ができることも、子どもが英語を身につけられる理由のひとつだと思います。

スーパーの店員さんも、お年寄りも、こちらがスウェーデン語を理解できないと解るとすぐに英語に切り替えて話してくれました。皆英語ができるなんてすごいなと思うとともに、スウェーデン語ができない外国人に対しても英語で話しかけてくれるので、親切な人が多いと感じられました。

給湯暖房費と環境先進地域

ストックホルムでは、光熱水費として電気・ガス・水道のほかに、給湯暖房費が徴収されます。水道のお湯と暖房が一緒で、水道、ガス、電気とは別なのです。これは地域熱供給システムのためです。スウェーデンでは多くのまちで地域熱供給システムが普及しています。

驚くのはその熱源で、技術の発展により現在は様々な熱源が利用されています。エリアとして100万人都市であるストックホルム市全体と近郊をカバーする熱供給会社Stockholm Exergiは、家庭からのシャワー等の排水、データセンターや多くの食料品店の冷蔵庫等の排熱を回収して、熱供給の熱源としています。また、海中や湖に熱交換装置を入れ、太陽光で温められた水からも熱を取っています。加えて、家庭から出た生ごみはアパートごとに回収され、林産業から提供される余剰木材、枝葉・木くずと一緒に、この企業の施設に運ばれて燃やされ、火力発電に使用されるとともにそ

の熱は地域熱供給システムの熱源となります。このようにして、なんと熱源の98%を再生可能なまたはリサイクルされたエネルギーで賄っているそうです。

北欧の地域熱供給の歴史は長く、現在のシステムは、長い年月をかけて熱導管というインフラ整備が行われ続けて今に至っており、熱導管があまり整備されていない日本がすぐに同等レベルで導入できるものではありませんが、個々の家庭、またスーパーやデータセンターなどから出る熱を放出して結果的に外気を暖めるのではなく、回収して熱エネルギーとして有効に利用する知恵や仕組みは、特に冬期の暖房で多くの化石燃料を消費する北海道に将来もっと取り入れられるものではないかと思います。

おわりに

私がスウェーデンで過ごした3年間は、コロナ禍があり、ロシアのウクライナ侵略によってヨーロッパ内で戦争が始まり、スウェーデン国内では選挙による政権交代があり、戦争の影響からNATOへの加盟がありと、大きく動いた時期でした。

そのような中でも、スウェーデンは環境やCO₂排出削減の国際世論をリードする国のひとつであり、交通インフラ政策に関してもひとつひとつに国内では是非の議論はあるのですが、その議論の土台は皆さん同じで、共通のベースがしっかりとあるように感じました。

国どうしの関係は2024年12月に「戦略的パートナーシップ」に引き上げられましたが、今後も経済・文化等様々な交流を通じて両国の関係が深まっていくことを願っています。



地下鉄駅と教会のある住宅街。電灯が道路に吊られている